—グラビア—

明治の文豪の作品中に見られた本学前身の済生学舎の軌跡をたどる

志村　俊郎[1]　　弦間　昭彦[2]

[1] 独立行政法人東京労災病院第二臨床検査科

[2] 日本医科大学

Follow Tracks of Saiseigakusha, the Predecessor of Nippon Medical School Was Seen in the Literary Master's Work of the Meiji Era

Toshiro Shimura[1], and Akihiko Gemma[2]

[1]Department of the Second Clinical Laboratory Medicine, Japan Labour Health and Safety Organization Tokyo Rosai Hospital

[2]Nippon Medical School

A

B

写真 1

日本医科大学のあるここ千駄木の地は，ご存じのように文豪が愛した町であります．本学の同窓会館は，明治期に二人の偉大な文人である森鷗外と夏目漱石が一時期住んだ旧居跡（旧東京市本郷区駒込千駄木町 57 番地）であり漱石文学発祥の地とも言われています．この住まいは，文化庁指定登録有形文化財で，明治 20 年（1887）頃，医学士中島襄吉（東京帝国大学明治 29 年卒，後に済生学舎廃校後の同窓医学講習会と日本医学校の産科学講師[1]）の新居として建てられたものの，空き家のままでありました．この家は，明治 23（1890）年 10 月に鷗外が 1 年余り住み，この間処女小説『舞姫』（1890 年 1 月，国民之友）]，『文つかい』（1891 年 1 月，吉岡書店）を刊行しました．その 13 年後には，偶然にもこの同じ家に明治 36 年イギリス留学から帰国した漱石が住みました．漱石は，猫の家と通称されるこの家に明治 36（1903）年 3 月～明治 39（1906）年 12 月の約 3 年半居を構え（**写真 1A**，協力：博物館明治村），この時の家主は，漱石の明治 26（1893）年東京帝国大学卒の学友斉藤阿具（歴史学者）でありました．この漱石の書斎「我猫庵」（**写真 1B**）では，「木曜会」と称し，夏目一門の漱石の教え子や，漱石を慕う若手文学者が集まり，さまざまな議論をした会合が開かれました．この家で漱石は『吾輩は猫である』（1905 年 1 月，服部書店）]，『坊っちゃん』（1906 年 4 月，『ホトトギス』収録）などの名作を執筆致しました．また，漱石が，いかに千駄木界隈に詳しいかは，漱石の『道草』（1915 年，朝日新聞に連載された長編小説）には，「その人は，根津権現の裏門の坂を上がって」「彼はまた団子坂をおりて谷中の方へ上がっていった」（『道草』P5，角川文庫平成 30 年改版初版発行）と小説の舞台ともなる漱石の居住していた千駄木近辺の記載が克明に書かれています．この建物は，現在，書斎の机の前の入り口に置かれた猫の像と共に「鴎外・漱石の家」として昭和 39（1964）年より愛知県犬山市の博物館明治村に移築保存されております．

文化の馨り高い千駄木の地の本学同窓会館の橘桜会館と文豪とのいかなる係わりがあるのかは，本学教職員にあまり知られていません．そこで本稿グラビアでは，各文豪らにまつわる済生学舎関連からの歩みの事実を具体的な記載文（鉤括弧内表示）を幾らか抜萃すると共に書き記します．

鷗外の小説『青年』（1910 年 3 月から翌年 8 月まで『スバル』昴発行所に連載）には，文中に作家志望の小泉純一，親しくなった医学生大村荘之助が登場する文に本学の前身「日本医学校」（『青年』本文 21 項 P209，注 32P317，岩波書店 2017 年改版第 1 刷）が出てまいりますし，また，鷗外の長男で，随筆家でもある森於菟も，『父親としての森鷗外』の「観潮楼始末記」に，鷗外が千駄木 57 番地から団子

連絡先：Toshiro Shimura, Department of the Second Clinical Laboratory Medicine, Japan Labour Health and Safety Organization Tokyo Rosai Hospital, 4-13-21 Omori Minami, Ota-ku, Tokyo 143-0013, Japan
E-mail：t-simura@nms.ac.jp
Journal Website（https://www.nms.ac.jp/sh/jmanms/）

写真 2

A　　B　　C

写真 3

坂上の観潮楼に引っ越した千駄木の日本医大近辺を「この土地の東側は，崖になって見晴らしがいい．根津に近い方は土地がひくく道の西側は大きい」(『父親としての森鴎外』P14，筑摩書房 1974 年初版 5 刷）と描いた文章を残しています．また森於菟は，大正 8（1919）年～昭和 10（1935）年まで日本医学専門学校及び旧制日本医科大学で解剖学の兼任教授であり，大正 14（1925）年度の同卒業アルバムに解剖実習中の写真と共に顔写真（**写真 2**）も掲載されています．その間，於菟は，母校の東京帝国大学医学部助教授を経て，その後大正 15（1926）年より帝国女子医学専門学校の組織学・胎生学の教授でありました．さらに漱石の書簡には，済生学舎創立者「長谷川泰」の実名が記されています．夏目漱石全集（第 22 巻　2019 年 7 月　岩波書店）の書簡の中に，本名の夏目金之助から劇作家若月紫蘭にあてた手紙（明治 37（1904）年 11 月 25 日（金）付）「本郷区元町一丁目三長谷川泰の裏」と泰の名前が出てまいります．

何よりも貴重な事実は，現在，本学同窓会館前には，千駄木の森鴎外・夏目漱石旧居跡としてノーベル賞作家川端康成揮毫による昔の左詰めで題字が刻まれている碑（碑文は鎌倉漱石の會元代表で故内田貢元明治大学教授記)，文京区指定文化財番号 56)（**写真 3A**）と周りに猫の像が二つある夏目漱石記念碑（**写真 3B**）が立っている事であります[2]．この夏目漱石旧居跡の碑は，日本医科大学と鎌倉漱石の會の寄付金によって建立・寄贈されたものであります[2]．この「夏目漱石旧居跡」の碑に書かれた題字（**写真 3C**）の由来は，川端康成の幼児期に亡くなった父が，本学前身の済生学舎出身の医師であったことによるものでもあるのかもしれません．川端康成の父宮本栄吉は，川端康成詳細年譜（編者小谷野敦・深澤晴美，2016 年頁 6～7，勉誠出版）によると，明治 20（1887）年に済生学舎に入学し，明治 24（1891）年医術開業後期試験に合格し，明治 25 年済生学舎を卒業したとあります．因みにこの夏目漱石旧居跡の碑の除幕式は，

昭和46（1971）年5月3日に施行され，本学関係者は，石川正臣元学長，北浜章元同窓会長，夏目家からは，次男夏目伸六さん（随筆家），三女の夏目栄子さんらが，除幕の紐を引かれました．

以上の如く，間もなく創立150周年を迎えようとしている日本医科大学の前身の済生学舎は，その他，近代以降では最初の職業女流作家である樋口一葉の医療相談を受けた済生学舎講師丸茂文良・むねが在籍しておりました[3]．また昭和61（1986）年文化勲章受章者でアララギ派歌人の土屋文明は，日本医科大学豫科で大正14（1925）年～昭和11（1936）年まで修身の講義を行い，フーフェラントの医戒を教授しておられました．土屋は，「命ぜられしフーフェラントの翻訳は年渡れるに果さざりけり」と小此木信六郎（日本医科大学第二代学長）の逝去を悼んだ歌が，土屋の本学在職時の歌集『放水路』（大内学而堂）（昭和5～9年）に三首詠まれています．また，土屋文明と同時期教員の同僚には，本学の「スクリバ文庫」[4]の寄贈に大きく関わったフリッツ・スクリバ（日本の外科学の父といわれたユリウス・カール・スクリバの長男）も日本医学専門学校の豫科職員として獨逸語講師（大正9～昭和2年）でありました．この様に本学には，当時より立派な医学者と共に著名な文学者及び人文学者も，教職員として在籍しておりました．

また，根津神社内には，森林太郎（森鷗外）らが明治39（1906）年9月に建立した碑銘水（奉納水飲み場）もあり，また日本医科大学は樋口一葉菊坂旧居跡付近に残る「一葉の井戸」（通称）等の文豪の史跡にも囲まれております．

協力：博物館 明治村より森鷗外，夏目漱石住宅の外観写真について掲載許諾をいただきました．

謝辞：各文豪の小説記載の提供については，元日本医科大学准教授安藤勉先生にご教示をいただきました．深くお礼申し上げます．

本稿は，令和2（2020）年12月，日本医科大学で開催された第121回日本医史学会学術大会（大会長 弦間昭彦日本医科大学学長）における著者（弦間・志村）による冒頭講演に基づいております．

Conflict of Interest：開示すべき利益相反はなし．

写真1A　愛知県明治村に移された森鷗外・夏目漱石住宅外観（博物館 明治村より掲載許諾）

写真1B　千駄木邸書斎の漱石（1906年）（国立国会図書館Webサイトより転載）

写真2　森於菟（1890～1967）
大正14年度の日本醫科大学卒業アルバム（日本医科大学中央図書館所蔵）

写真3A　本学同窓会館前にある川端康成題字の夏目漱石旧居跡碑（日本医科大学同窓会所蔵（済生学舎ギャラリー））

写真3B　二匹の猫像のある済生学舎ギャラリー案内版（日本医科大学所蔵（済生学舎ギャラリー））

写真3C　夏目漱石旧居跡の題字は、ノーベル文学賞受賞者川端康成の揮毫（日本医科大学所蔵（済生学舎ギャラリー））

文　献

1. 唐沢信安：済生学舎廃校後の各種講習会及び私立東京医学校・私立日本医学校．日本医史学雑誌　1995; 41: 41–73.
2. 日本医科大学同窓会：夏目漱石旧居跡碑の建立．日本医科大学同窓会報　1971; 124: 1.
3. 志村俊郎，唐澤信安，殿崎正明，山本　鼎，幸野　健，寺本　明：女医丸茂むねの一生と明治期の女子医学生達の教育．日本医史学雑誌　2012; 58: 167.
4. 編集 日本医科大学：スクリバ文庫．制作 日本医科大学 2020年4月1日発行 pp1–20.

日本医科大学医学会雑誌は，本論文に対して，クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際（CC BY NC ND）ライセンス（https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/）を採用した．ライセンス採用後も，すべての論文の著作権については，日本医科大学医学会が保持するものとする．ライセンスが付与された論文については，非営利目的で，元の論文のクレジットを表示することを条件に，すべての者が，ダウンロード，二次使用，複製，再印刷，頒布を行うことが出来る．